

〔訳文〕

承久三年（一二二二）の大乱の時に、梅尾の山中に官軍の人々が多く匿まわれ保護されているとの噂が耳に入ったので、秋田城介がこの梅尾の寺領内に乱入して探し回った。乱暴のあまり、明恵上人を捕縛して、先に追いやりつつ六波羅まで来たところが、ちょうど北条泰時が訴訟を聴断して座におり、北条方の軍兵が堂の上にも下にも満ち満ちていた。泰時は、先年六波羅にいた時に、この明恵上人の徳の高いことを聞き知っていたので、まず何はさてびつくりきようてん、恐れ入って自席を去り、上人を上座におすわりいただいた。この様子を見て秋田城介は、たいへんな失策をしかしたと気付いて、気が抜けた様子であった。そこで上人が申されたのは、「高山寺に逃げ込んだ人々を多数隠し置いたという報告があった、といわれるが、それはさぞかし左様でありましょう。なぜかと言えば、高辨（私）の様子を時々聞き知る人もありましょう、若い時代から本寺を出てあちらこちらと修行し回ってからは、平常習いおいた仏法を説いた文章にさえ拘泥していません。ましてや一般社会の事柄については、一度も考えたこともなく永い年月を経てまいりました。それ故に身分を問わず、ある特定の人の味方をしようという心が生じても、これは僧侶としての規律からは、あてはならぬことですし、その上、このような心がふと浮んでも、二度と思いつけることはあ

りません。また人が縁故をたよって自分のために祈禱してほしいと依頼を受けることが多くありました。生きとし生けるものが三途で苦しみ悶えているのを、何はともあれ最初に祈禱して助けられるなら祈り申しませう。これら三途の苦しみに悶え沈む者を救ってから後にこそ、現世の夢のような願い事を祈禱しても差し上げませう。大事をなす時は小事は無視しても止むを得ませぬと返事して、少しも取り上げないままに何年も経過してきました。それ故に高辨に依頼して祈つてもらったという人は、この世にはいないと思っております。さてこの梅尾の山は御仏に差し上げた寺領であるから、仏教の慈悲の精神から一切の鳥獣などの狩猟を禁ぜられた土地であります。それ故に鷹に追いかけられる鳥、獵師の手を逃れにげる獣、皆この地に隠れて余命を保つのである。それ故、敵の手を遮れる兵士が、やつとの思いで命ばかり助かって、木の根本や岩と岩の間に隠れているのを、私が咎めを受けるからというので、無情にも追い出して、そのため敵の手に捕えられ生命も奪われることを、無視できましょうか。私の根本の師匠釈迦如来は、前世では鳩の代りに鷹の餌になられ、また飢えた虎のために我が身を給わったのである。それ程までの大慈悲には遠く及ばぬながらも、これくらいの人を見逃す慈悲が無くてすみましようか。隠すなら袖の中にも、袈裟の下にも隠してやりたいと思つたことでした。この後も援助いたしましたましよう。この私の行為が幕府の施政の方針に不都合でしたならば、直ちに私の首を斬られるがよい」と言われた。泰時、このお言葉を聞かれて、しきりに深く感じて涙を流して申されるに、「委しい事情も知らない

田舎侍どもが命令もなく入り込んで、乱暴をいたしましたのは、何とも申し訳のないこと
 でございます。その上、上人をここまで引き立て申した事、恐縮至極でござります。今度も
 し無事に上京致しました折には、最初に梅尾に参上致しまして、生死の一大事についてご指
 導を賜りたく歎願申し上げますと以前から期待しておりながら、ただいまの大事変に邪魔
 されて、今日までそのご縁のなかつたところに、思いもしないことでご面会致しましたのも、
 それ相応の仏のお取り計らいかと思われれます。それでお尋ね申しますが、どのようにして生
 死の迷いから離脱できましょう。またこのような裁判に少しの私曲もなく道理のままに裁く
 のであれば罪にはならないかと思いますが、どうでありましようか」と。上人のお答えは、
 「少しでも道理からはずれて行動する人は、来世のことはいうまでもなく、現世で間もなく
 滅亡するものであります。そのことは申すまでもないが、たとい正しい道理に随つてなされ
 ても、それぞれの分に應じての罪は逃れられぬこともありましよう、生死の助けとなるなど
 とは、とんでもないことであります。山中の僧侶でも、やはり仏の教えの奥深い道理に合わ
 ないなら、三界六道に迷いの生死を続けるという苦しみから遁れるわけにはゆきませぬ。ま
 して俗界の欲心から出発して、種々の雑念に縛り付けられて、仏の教えということすらも知
 らないで毎日を送っている人は、なおのことであります。世間に大地獄というものが現れる
 のは、以上のような人が落ちて煮られるために外なりません。いつ来るか予測もできぬ死と
 いう恐ろしい鬼は、弓矢や刀剣や杖では防ぎようもなく、ただいまでもあなたを死の世界に
 引きずり込むであろう時には、どのようにされますか。ほんとうに生死の苦しみから遁れ
 たいと思われるなら、しばらくの間はどんなことでもなげ捨てて、真っ先に仏のみ教えを信
 じ、その仏法の真理を十分に理解して政治を執り行われるなら、自然と宜いこともございま
 しょう」といわれた。泰時は上人のお話を聞いてたいへん信仰の様子で、心に深くとめられ
 たらしかつたが、やがて御輿の用意をして上人をお乗せし、門の近くまで泰時自身でお送り
 申し上げた。その後、世の中が少し平和になつてからは、いつも梅尾に参詣して上人と仏法
 について話をされた。